

月報

25号

発行所

青丘文庫

発行★韓 哲 嶋 編集★金 慶 浩

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2階

TEL (078) 734-5989

最近の韓国社会△云に田心う

李 景 珉

十年ほど前は、私は同胞の知人に会って、朝鮮の国力は世界で何番目くらいか、という雑談をしたりした。南北朝鮮の人口、経済力、識字率、自然環境、それに人々の体力と旺盛な生活力等を総合してみると、おそらく一四番目あたりではないかとの答えが出た。日本生まれで、海外へとなればせいぜい韓国に二度行った経験を持つだけの友人は、このような朝鮮国の順位に驚いていた。彼はたぶん、三十か四十番になるのではないかと思っていたらしく、私たちの結論に信じられないような表情だった。それもそのはずだ。日本からみられる朝鮮の存在は実に小さなもので、それは在日同胞の意識の内面にまで深く根をおろしている。

ところが近ごろは、このような国力くらべの話は止めになっている。韓国経済の成長ぶりは世人の周知のとて、韓国人自らの過大な宣伝の影響で、最近では貿易摩擦さえ引き起こしている状態である。ソウルオリンピックの話になると、一部のたかぶっている韓国人の顔がちらつく時もある。

それより、韓国社会を見よう、ということにしている。八五年春の総選挙の結果、一気に多数進出を果た

した野党勢力は、ここ二十年間の政府の経済、社会政策と対決している。野党といっても伝統的な保守勢力であるから、与野党の路線上の根本的な違いはなく、何か変革が期待できるものはないであろう。しかし、同じ保守勢力の内部の闘争ではあるが、今までの経済至上主義がこのへんのところまでいくぶん修正されないことには、韓国社会はどうにもならない状況にある。今年の一月、ごく普通の学生が警察当局の拷問により殺された事件は、いまの政權の運命を左右する悲劇的な惨事であった。韓国政府はこれからどのように対処していくのだろうか。

それにしても、韓国の学生運動のバイタリティーには、驚嘆のあまりいう言葉がない。世界のどこに、あれほど熾烈な闘いがあるだろうか。ドゴールを引き下ろしたフランスの学生たちは、最近は何いというよりお祭騒ぎにせいをだしている、というではないか。無気力な大学キャンパス、生活保守主義が充満した日本からは、到底考えられないことが、いまソウルでは毎日起こっている。そして、それが解放後四十年間、絶えず続けられていることに注目しなければならぬと思う。朝鮮民族は、世界的にもまれな生き方をしているのではないだろうか。

在日朝鮮人祖親月例会（第8回）

(2)

一九八五年八月一九日、在日朝鮮人二世である父が六九年の生涯を開いた。酒に溺れ、家族に暴力をふるう父の生は私にとってまるで興味かれないものだと思われた。だが父の死が扉であった。開いた向こうには玄海灘まで寄せて返す時が来る、私の心は次第に過去の歴史の側へと遊び回していった。

一九一六年、父は第一次世界大戦の最中に生まれた。日韓併合からすでに六年、父の祖国は強圧的な植民地政策により疲弊し、苦悩の淵に喘いでいた。いかにも朝鮮的な伝統をはびこらせた慶尚北道の片田舎、没落両班の三男の家に生まれた父は、不運の刻印を捺された人へと歩み始める。

早業、植民地会社の収奪のため、生活は悲惨を極め、父は十六歳で渡日する。一九三二年、行先は神戸であった。五三年の家の系譜図、黒皮の手帳を握りしめた父を、思いもしない厳しい生活が待ち構える。不況の嵐は最大限吹きつり、日本人でもろくも働さずにありつけない。所詮朝鮮人など使役の労働力に過ぎなかった。

兵庫港沿いに吹きだまつた朝鮮人部落、零細な町工場と長屋が混ざり合った路地で、散髪屋の小僧、ゴキ靴工、鋳物工

と時代の波に父の生活は流されていく、二百万を下らない朝鮮人徴用工の一人として軍需施設へ送り出される。その間の結婚、妻子との別離、家族の死。父の人生は踊った。

一九四五年八月一五日、一時帰国中の父が向き合う時代の風景は一変する。米ソ冷戦下、揺れ動く朝鮮に、故郷といえども生活の基盤は望むべくもない。再渡日、ふたたび神戸、ゴキ靴、ケミカルシューズと手がける生活の中、父は浮き沈みをくり返し、よどみを深めていく。母と出会う。再度へ手れた家庭を涵養りで横う父の日常、娘である私にとって父は憎悪と軽蔑の対象でしかなかった。

訪れた父の死、父と私の関係は終わってしまった。だが、すべては終わりから始まった。ただの老在日朝鮮人に過ぎない父とのかかわりが、今やいかなる現実より重い意味を帯びる。父の生活史に日朝関係、うめれた神戸の歴史が浮かびあがる。そして私自身、在日朝鮮人二世としての自己認識の作業を、父の生をたぐることと始め得たのである。

『父のREIA』郭早苗 長征社刊、一九八六年十二月、1500円

研究会員の報告がある。た。一九八七年二月、二四〇〇円

著者郭早苗の朝鮮の歴史と文化 大改訂版

▲朝鮮民族運動史研究(第六回)例会報告

テーマ 「日韓併合と朝鮮」

原田 環

大韓帝國、つまり李朝末期の朝鮮の知識人は、朴殷植に代表されるように清の梁啓超(一八七三—一九二九)の思想的影響を強く受けている。

一方、梁啓超の著作の中にも、朝鮮に言及したものがいくつかあり得る。これらは、朝鮮が日本の植民地と化してゆく過程をとりあげたもので、左の如くである。

- (1) 「朝鮮亡国史略」(『新民叢報』一九〇四年 No. 53、54)
 - (2) 「日本之朝鮮」(『新民叢報』一九〇四年 No. 60)
 - (3) 「日韓併合問題」(『国風報』一九〇一年第一六期)
 - (4) 「朝鮮哀詞五律二十四首」(『国風報』一九〇一年第三三期)
 - (5) 「日本併吞朝鮮記」(『国風報』第三三、三三期)
 - (6) 「朝鮮滅亡之原因」(『国風報』一九〇一年第三三期)
 - (7) 「朝鮮貴族之将来」(『国風報』一九〇一年第六期)
- 周知のように梁啓超は、清末の変法派の康有爲の弟子で、師の康有爲とともに一八九八年の戊戌の変法に関わったが、西太后のクーデターによって日本に亡命し、『清議報』、『新

民叢報』、『新小説』、『政論』、『国風報』などをつづき、くに創刊しこれを通じて立憲君主論を展開した。彼が日本に滞在したのは、一八九八—一九〇一—二年のおよそ二年間であつた。つまり、彼は朝鮮が日本の植民地と化してゆく一九〇〇年代にちやうど日本に居合わせたのである。

梁啓超は、日本による朝鮮の植民地化と、外交、朝鮮側の要因、日本の政策の三つかりとりあげている。外交的観点では、甲申政変後の天津条約(一八八五)、日露協約(一八九六)、ポーツマス条約(一九〇五)、韓国併合に関する条約(一九一〇年)の諸条約によって朝鮮が清の属国から日本の植民地と化していったとしている。朝鮮側の要因については、とくに大院君を「乱亡之張本人」として指摘するとともに、一進会に対して厳しい批判を加えている。日本の政策については、明治維新以降の対朝鮮政策を客観的にトレースしている。

右の(1)に対する朝鮮における反応は、中望「統梁啓超所著朝鮮亡国史略」『太極堂報』二四、陰曆二年九月二十四日)があり、朝鮮の亡国の原因をはつきりと知ることができると高く評価するとともに、四五年はやく世に出ていたりと

切迫している。

今後、報啓超のこれらの著作を深く分析することによって、日韓併合問題を東アジア史の中で、より立体的に明らかにすることができるとありう。

新着図書案内

- ・ 近代史研究論著目録(目録) 近代史研究会編集委員会 編、発行地、発行社不名 85年 B5 二四五頁
- ・ 朝鮮佛教史 鎌田茂雄著、東京、東京大学出版会 85年 307p
- ・ 大韓民国臨時政府独立新聞、近代大学校史文庫 刊
- ・ 韓国現代史資料叢書一五巻 金南植他編 刊

刊 86年 9月

- 刊一 早 小見見 第一、二巻 漢城日報 四五〇四年
- 第三巻 朝鮮人民報、独立新聞(四五〇四年) 第五巻 解放日報、青年解放日報、努力人民

刊二 早 雑誌編

- 第六巻 南緯、民主朝鮮、第七巻 民主主義、新世界、第八巻 新朝鮮、第九巻 朝鮮経済、協同、第十巻 本、政治、右翼、中途、第一巻 政治、左翼、北緯、第二巻 政治、年鑑、日誌、諸事録、第三巻 米ソ交際、政治、指導者、南北協商、第四巻 経済、社会、文化、第五巻、労働、農民、(ソソルモ四八年まで)

★ 研究会案内

(一) 在日朝鮮人運動史研究会(本部会)(第八九回)例会

日時 一九八七年三月八日(土)午後二時

テーマ 在日朝鮮人の帰化と帰化後について

報告者 佐々木龍昭

(二) 朝鮮民族運動史研究会(第六七回)例会

日時 一九八七年三月二一日(土)午後三時

テーマ 明治期 日本朝鮮進出市況について

報告者 韓 哲誠

※ 場所はソソルモ青丘文庫にて、

次号(四月)のコメントは 水野直樹氏